

INTERVIEW

公益社団法人地域医療振興協会
ヘルスプロモーション研究センター アドバイザー
柳川 洋先生



【プロフィール】 柳川 洋先生 1961年金沢大学医学部卒業。同大学院医学研究科修了後、ペンシルバニア大学留学。帰国後、国立公衆衛生院疫学部室長として勤務。1977年自治医科大学公衆衛生学教授に着任。1999年埼玉県立大学副学長を経て、2003年同学長に就任。2007年より公益社団法人地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センターアドバイザーを務める。日本公衆衛生学会名誉会員、日本疫学会名誉会員、日本循環器管理研究協議会顧問、日本川崎病学会顧問、一般財団法人日本公衆衛生協会理事、一般財団法人厚生労働統計協会評議員、非営利法人日本川崎病研究センター副理事長、一般財団法人日本健康開発財団評議員、一般財団法人全国保健福祉情報システム開発協会理事、英国王立医学協会公衆衛生医学部門フェロー。

臨床と疫学の連携で、 医療の質の向上を。

聞き手：山田隆司 公益社団法人地域医療振興協会 地域医療研究所所長

公衆衛生の道へ

山田隆司(聞き手) 今日は、ヘルスプロモーション研究センターの柳川 洋先生にお話を伺います。先生が自治医大で教鞭をとられていたころ、私も学生として先生から教えていただきました。先生には、今、地域医療振興協会のアドバイザーとして

公衆衛生やヘルスプロモーションに関する業務の指導をしていただいています。

まずは先生のこれまでのご経歴からお話いただけますか。

柳川 洋 私は、昭和36年に金沢大学の医学部を卒業し

て、当時はインターン制度があったので、1年間のインターンを終えた37年、金沢大学大学院医学研究科に入り、公衆衛生学を専攻しました。その時に指導してくださったのが重松逸造先生で、重松先生のごことは後で少し詳しくお話します。

大学院修了と同時に、ペンシルバニア大学医学部に昭和41年から1年半ほど研究員(Research Associate)として留学し、当時疫学の大家といわれていたヨハネス・イプセン先生のご指導を受けました。帰国後は、重松先生が古巣の国立公衆衛生院に疫学部長として戻られ、お誘いをいただいたので、疫学部慢性伝染病室長として赴任し、10年間ほど幅広い疫学の仕事をさせていただきました。

自治医大に赴任したのが昭和52年8月です。ちょうど自治医大の第1期生が6年生の時でしたね。それ以来平成11年3月まで21年半お世話になりました。

その後埼玉県立大学創設準備のお手伝いをした縁で、平成11年に副学長として着任しました。その後学長を1期務めました。平成19年3月に任期を終えて退職した後に、地域医療振興協会のヘルスプロモーション研究センターのアドバイザーとして仕事をさせていただいています。

山田 先生は卒業されてすぐに公衆衛生の道へ入ろうと思われたのですか。

柳川 多くの人がそうではないかと思うのですが、私も学生時代、公衆衛生の授業にはほとんど出たことがなかったのですね(笑)。だから卒業した時は

公衆衛生が何かということはよく知りませんでした。当時は、医学部卒業後1年間のインターン制度があり、杉並区にある河北病院(現在の河北総合病院)でインターンをしていました。たまたま非常勤で来られていた内科の先生から「今度金沢大学の公衆衛生学教室に偉い先生が着任するから入らないか」とお誘いを受けました。その先生にはいろいろ教わって信頼していたので、「では重松先生にお会いしましょう」ということになりました。

山田 指導医との縁のようなものですね。

柳川 まさに縁ですね。人生というのはみんな縁でつながっているようなものですね。重松先生が金沢大学に赴任した年に私も大学院の学生として教室に入れていただき、基礎から公衆衛生、疫学を教えていただきました。めぐり会えた先生の人柄によって、その教えを受ける人間がいい生涯に恵まれるかどうかが決まるのではないのでしょうか。

山田 先生にとってはかけがえのない恩師なのですね。

柳川 そうです。そういう先生にお会いできたからこそ、それ以降現在まで50年、楽しみながら公衆衛生の仕事が続けて来ることができました。誠に残念なことですが、恩師 重松逸造先生は昨年2月、94歳で亡くなられ、大変寂しい思いをしています。せめてもの恩返しとして、重松先生の教えや人徳といったものをできるだけ正確に後輩に伝えていきたいと考えています。

疫学との出会い

山田 それから先生はアメリカ、ペンシルバニア大学に留学されるわけですが、それは何かきっかけがあったのですか。

柳川 重松先生の知り合いの青木國雄先生(現名古屋大学名誉教授)がペンシルバニア大学医学部予防医学・公衆衛生学教室(Department of